内藤正敏の語ったこと
――「異界出現」展トークイベント記録 (1)

開催日：2018 年 6 月 29 日

会場：東京都写真美術館１階スタジオ

出演

内藤正敏
写真家・民俗学者

赤坂憲雄
民俗学者、学習院大学教授

編集

石田哲朗
東京都写真美術館　学芸員

内藤正敏の語ったこと
――「異界出現」展
トークイベント記録 (1)

出演：内藤正敏
赤坂憲雄

編集：石田哲朗

本稿には現代において不適切であると思われる語句が含まれていますが、作品の時代的背景を考え合わせ、そのままとしました。予めご了承ください。

内藤正敏（1938-2025）は、「モノの本質を幻視できる呪具」である写真と、「見えない世界を視るための“もう一つのカメラ”」である民俗学を半世紀以上にわたって追求し、数多くの写真作品と著作を手がけた。[1] 彼はいつも自身の作品と研究対象について、興味の尽きることなく長い時間をかけて活発に語ったが、晩年は健康上の理由から人前に出ることが少なくなった。振り返って見れば、2018年、東京都写真美術館の個展「内藤正敏　異界出現」において実施されたトークイベントは、作家の生の声を聞くことができる生前最後のインタビューの一つであったと言えよう。今回貴重な音声記録を文字化し掲載することとした。

対談実施の経緯を少し説明したい。展覧会会期中、作家本人は病気療養中であったため、体に負担をかけるトークイベント出演は事前に予定されていなかった。幸いにも体調が回復し、経過が順調だったので、作家本人の来場が実現したのである。当日は、事前に登壇予定だった赤坂憲雄氏からの提案により、急遽、赤坂氏を聞き手とする作家との対談が実現した。

文字起こしにあたっては、なるべく作家の語り口を生かすことを心掛けたが、読みやすさを考慮して、発言を最低限編集し、文意が取りにくい箇所は言葉を補足した。トークは会場壁面に投影されるスライドショーを見ながら進められた。本論中で図版掲載のない作品については東京都写真美術館公式サイトのコレクション検索等を参照されたい。

❖1　内藤正敏「もう一つのカメラ 写真とフォークロア」『内藤正敏 異界出現』（展覧会図録）、東京都写真美術館、2018年。pp.154-157。初出『日本写真全集9 民俗と伝統』小学館、1987年。

初期作品、岡本太郎の写真

内藤：（《現代》という作品の画面上にあるのは）花火です。[2] それを白黒反転させてね、（画面下の人物たちの撮影場所は）アメリカ大使館のところだったけど、バックが白い所で、スローシャッターで色々撮った。

❖2　《現代》『サンケイカメラ』1959年5月号に掲載。

赤坂：《白色矮星》**[図1]** は、どうやって作ったんですか？

表現とテクニック・10（ネガ表現）

白色矮星

写真・内藤正敏　解説・吉村伸哉

WHITE DWARF MASATOSHI NAITO

内藤正敏は本誌やSF誌などに、サイエンティフィックな幻想写真を発表している異色カメラマンだ。本業は高分子化学の研究者である。早大理工学部卒業後、本業のほうで某レーヨン会社に就職したのだが、早大写真部時代、遠記憶をして「興奮する」と驚かせた？　ほどの彼の空想力や感受性は、他道な会社の研究室にとじこもっているのには満足すまたようと、特等会社をやめ、フリーのプロ写真家（というと聞えはいいが）になって、現在に至っている。現在日本の民話や、伝承を研究して、それから歴を得た異色シリーズを撮りたいそうである。今年は二回ほどの公写写真家協会賞をとった。

「ところでこの「白色矮星」は別頁の解説にあるとおり恒星の末路の姿である。彼の写真のトップの大きな太陽らしきものは、白色矮星の崩壊時「爆発巨星」のイメージを表現しようとしたもの。反転された光源とした理由は、白色矮星の表面の風景はかくもありなん、ということだろうか。技法的にはネガ表現というLOPt、眼りたてていうことはないが、しかし「反転表現」のような特殊技法としてはいささか平凡かにまみれたものでも。この内藤君みたいに「白色矮星」というような興奮をイメージのために利用したとき、新鮮な興味をおぼえさせる。

〈共通データ〉

風景・東京東雲埋立地／ニコンS.3　ニッコール35ミリF2.5　コニパンSS　対F16　15分の1秒　D76　コニリスで引伸　D111　光・星屑・小石をあり、ランプの前におき、カメラレンズ前にグリースをぬった／ガラスを用いて撮影／アートビュー6×9　フジ　150ミリF6.3　コニパンSS　対F16　2分　D76

図2
岡本太郎撮影・文、内藤正敏プリント・編、岡本敏子編
『岡本太郎 神秘』二玄社、2004年

図1
《白色矮星》『カメラ芸術』1963年10月号、東京都写真美術館図書室蔵

内藤：これはね、簡単なこと。今でいうと東京都庁が建っているところ、あそこは淀橋浄水場があってね。この辺りを壊していくんですよ、ガンガンガンガンと。1970年頃ですよ、その頃都市をどんどん崩して、その崩した下がそれ（写真に撮った情景）なんですね。[3]

赤坂：埋立地じゃないんですね？

内藤：淀橋浄水場。ごみを埋めて。（それは）自らの死体ですよね、こうやってもう一つの新しい都市を作る、都市が都市を食って発達していく。僕の場合は何かいつも、そういうことがテーマみたいですね。即身仏をやってから、そういう「作った写真」を全部やらなくなるんだけど、（それ以前は）ものすごいテクニック、あの手この手で作っていた。これは《黒い太陽》[4]。これも学生時代ですね。月例写真に応募してね。その年の最高賞をもらって。次の年ぐらいかな、ここは東京都写真美術館、TOPですけど。（竹橋の）国立近代美術館で、連続して何年か展示された[5]。（こういった仕事は）写真界じゃ全然知られてないですね。写真評論家が書いたものを（人は）読んで、また（文章を）書いていくでしょ。そういうのを僕は読まないしね。

内藤：たとえば、岡本太郎の写真[6] **[図2]**。普通は岡本太郎らしい写真を選んでネガに忠実に（プリントする）。僕は元々、（正統な）写真を習ったこともないしね。岡本太郎を発見するんだったらネガから、僕は焼き付ける時には、あの手この手で焼き込んだり。ネガを忠実に再現していないんですね。雑誌『東北学』で特集したときに、岡本太郎論を書いた。岡本太郎美術館に通って、彼のネガをルーペ

❖3　内藤の発言中「淀橋浄水場」「1970年頃」とあるのは誤認で、実際は東京オリンピックに向けた都市開発を背景とした作品で1963年頃に撮影されたと見られる。掲載誌上の解説には「風景・東京東雲埋立地」と記載。

❖4　《黒い太陽》『カメラ芸術』1959年11月号に掲載。

❖5　東京国立近代美術館で1960年から1963年まで開催された「現代写真展」を指す。内藤はこの展覧会に二回出品している。

❖6　岡本太郎（1911-1996）は1957-63年にかけて青森から沖縄まで集中的に日本の民俗文化を取材・撮影し、『日本再発見―芸術風土記』（新潮社、1958年）や『神秘日本』（中央公論社、1964年）といった著作を発表した。内藤と岡本太郎の「共作」については、岡本太郎撮影・文、内藤正敏プリント・編、岡本敏子編『岡本太郎 神秘』（二玄社、2004年）を参照のこと。内藤の岡本太郎論は、内藤正敏「岡本太郎の二つの眼」『季刊東北学　特集〈明日の岡本太郎〉』（東北芸術工科大学東北文化研究センター・編、2007年）に掲載。

で全部見た。やっぱりいいのがあるんですよ。浮浪者みたいな人がいるとその後を追っかけて撮ったり、しゃがんで撮ったとか分かりますよね。そういう岡本太郎を徹底的に発見していったんです。それを僕流にプリントしていく。そうすると全然違う、もう一つの岡本太郎が出てくる。それこそ（私にとって）真の岡本太郎ですから。

赤坂：すごい嫌われたよね、内藤さんのこの仕事。

内藤：あのホントにこれ、そのまま（勝手に）やったら犯罪になっちゃいますから。

赤坂：内藤正敏のやったことは、すごい暴力的なことで、介入する訳ですから。でもやっぱり（岡本）敏子さんってすごい人だったよね。[❖7]

内藤：敏子さんが著作権継承者で、許可取らないと犯罪になっちゃいますから。最初に「こういう写真にするんだ」って見せたら、「面白いわ」って、逆にけしかけられた。

赤坂：晩年の敏子さんと内藤さんとみんなで付き合いましたけど、いやあ面白い人でしたね。

内藤：岡本太郎のネガを内藤正敏の作品にするっていう、そういうコンセプトでやったんですよ。

赤坂：「岡本太郎：撮影・文、内藤正敏：プリント」。異様なことですね。敏子さん、それを受け入れるし、喜びましたよね。

内藤：（敏子さんは）岡本太郎の影響受けてますからね。（岡本太郎がいた）当時、フランスは最先端の知識人が集まってましたでしょ。

赤坂：とんでもない連中が集まってた。で、マルセル・モースから民族学を学んで、そういうものをほとんど岡本太郎という人は表に出さなかったですけど。秋田のなまはげだって、エリアーデのシャーマニズムとか全部分かった上で、読んで、書いてますよね。[❖8]

内藤：（写真を見ながら）これは《キメラ》っていう作品なんです **[図 3]**。

赤坂：これ、（内藤さんの）お父さんの目玉なんですか？

内藤：ええ。

赤坂：目玉おやじっていたね。

❖7　岡本敏子 (1926-2005) 岡本太郎の秘書で後に養女。約 50 年間、太郎の制作活動に立ち会い、取材に行動、執筆を助ける。太郎のアトリエ兼自宅を改装した岡本太郎記念館の初代館長。

❖8　マルセル・モース (1872-1950) フランスの社会学者、文化人類学者。ミルチャ・エリアーデ (1907-1986) ルーマニア出身の宗教学者・民俗学者

図 3
内藤正敏《キメラ》『アサヒカメラ』1964 年 4 月号、東京都写真美術館図書室蔵

内藤：目玉、普通に撮ってね、それを（プリントで）焼き込んだり、覆い焼きとか。《キメラ》を発表したのは『アサヒカメラ』だったかな。4月号か何かに発表するんですよ。水木しげるがね、すぐその年の秋に『鬼太郎』で。僕の方が早いんです。全然早いんです。[❖9]

赤坂：ちょっと（話が）戻りますけど、内藤さん、なぜ20代の初期作品を焼き捨てたんですか？即身仏に出会って焼き捨てたって。

内藤：（〈コアセルベーション〉について）これは化学薬品を（使って）ね[❖10] **[図4]**。偶然、といっても偶然的偶然じゃダメでね。こっちがコントロールしていく。ガラス板の上で。即興と偶然、それを上手くコントロールしながら。まさに写真のジャズですよね。

赤坂：写真のジャズですか！

内藤：ちょうどこの頃はジャズが最高に面白いものがばーって出てくる時代だったんですよ。1960年代。その影響ですね。ジャンジャンジャンジャンかけながらね、レコードを。オーネット・コールマンとか、チャーリー・ミンガスとか。[❖11]

赤坂：作品制作する時、音楽流してるんですか。

内藤：やりましたよ、ええ。もうハイの状態ですね。こっちがグーッていかないと、ある常識のレベルを超えれないんですね。

赤坂：ジャズ聴いてたんだ……想像したことなかったです。内藤正敏の写真と音楽なんて語られたことありますかね？

内藤：ないでしょうね。

内藤：僕は卒論のテーマは、トロロアオイって天然高分子です。[❖12] その反応、電気泳動というのを調べてね。早稲田の理工学部で、（専門は）化学。それがまた、すごい。僕は脱線していくでしょ（笑）？

赤坂：時々戻ってきますけど。（笑）

内藤：科学者になったら、それなりに僕は業績を上げてたと思うんですけど。

赤坂：僕は内藤さんに賭けられる商才があったら大金持ちだと思うんですけど。

内藤：まあトロロアオイっていう天然高分子の研究をしてた時に、新し

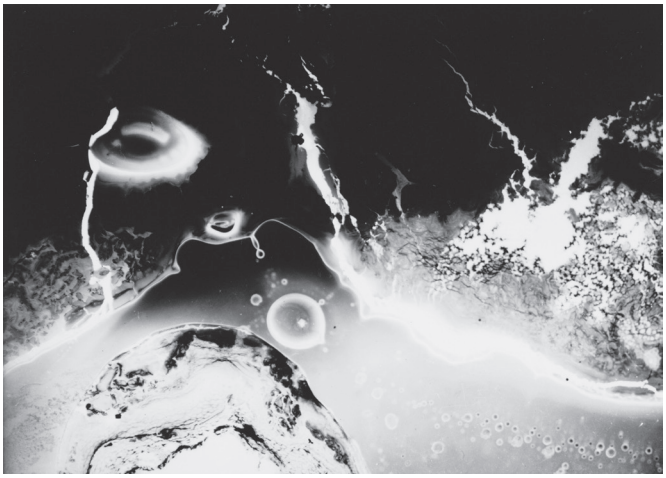

図4
内藤正敏〈コアセルベーション〉より、1962-63年、ゼラチン・シルバー・プリント、東京都写真美術館蔵

❖9 水木しげる(1922-2015)漫画家、妖怪研究家。漫画作品「鬼太郎」に登場する「目玉おやじ」の起源について、内藤は多少誤解している。ここで彼が指摘するのは『アサヒカメラ』で内藤正敏の〈キメラ〉が掲載された後、1965年『週刊少年マガジン』で、水木しげるの漫画「墓場鬼太郎」が掲載されはじめたことだが、しかし実際、同作のシリーズはそれよりも以前、貸本漫画時代の1950年代末、既に発表されていた（水木しげる『貸本まんが復刻版 墓場鬼太郎1』角川文庫、2006年）。影響関係は不明であるが、おそらく同時的に、この二つのキャラクターには造形的な類似が生じたのだろう。
事実関係はともかく、この二つの造形の類似は同時代的な現象と捉えることができるだろう。

❖10 作品シリーズ〈コアセルベーション〉で内藤は、旧ソ連の生化学者オパーリン(1894-1980)による生命の起源説に着想を得て、ガラス板上の高分子物質（ハイポリマー）と有機溶剤の化学反応を撮影している。

❖11 オーネット・コールマン(1930-2015)ジャズ・サックス奏者。チャーリー・ミンガス(1922-1979)ジャズ演奏家（ベース、作曲等）。

❖12 内藤の大学卒業論文のテーマは「トロロアオイの電気泳動的研究」。トロロアオイはアオイ科トロロアオイ属の植物で、紙漉きの材料の中でも重要な「ネリ」の原料となる。

いジャズが台頭してきた。

赤坂：狂うんだ……内藤さん、もう日常的にハイじゃないですか。

内藤：あの、まあそういうことがありましてね。（笑）

赤坂：天然高分子ってカタカナでいうと、何？　ハイポリマー？

内藤：人間の体なんかも全部高分子ですよ。

赤坂：でもさ、こういうの全て捨ててしまうでしょ？　内藤さん、ある時。それ知りたいんですよ。どうして？ こんな面白いのに。（写真を）こんなにでかくした時、みんなもう、のけぞって、衝撃だったよね？

内藤：あの当時でもみんなびっくりして。これ僕 20 代でやってた写真です。

赤坂：内藤さんは理系なんだよね。非常に技術というものに対する知識もあるし。その技術というものを遊びながら、壊していく、その壊していく瞬間に何か見えてくる、みたいな。何かそういうことをしていたんだなと思いますけど。でも後の写真からは、僕らはそういった技術的なことは、読み取れないんですけど、でもすごい技術なんだなって思います。

〈即身仏〉

内藤：即身仏に出会ってから、今度ドキュメンタリーになっていくんですよ。（〈即身仏〉を撮影した）この時僕はね、お寺に泊まり込んで。寒いですから……祭壇の下のところで寝泊まりして、何年間もそういう生活。こういう人たちがどういう修行をしたんだろうかって。色んな真似事も体験したいってんで、山伏の修行に入ってね。けっこう僕は位も持ってるんですよ。内藤験修院って（いう山伏名で）、えらい位ももらって。世が世なら山伏で食ってたんですけど。その時に写真を撮って「日本のミイラ」って記事を（発表した）。（でも）写真界を絶ったんです。友達付き合いも全部。それで一人お寺に籠るみたいなもんで。[❖13]

赤坂：そういうことがあるんだ。

内藤：この頃は大型カメラを持って、テクテク歩いて、山に登って寺へ行って。そこへ泊まり込むんですね。そして大型カメラで撮ると、細かいところまで全部写り込むんですね。皮膚の一部一部が全部写り込んでいる。それを大きく伸ばす。そうするとね、この背後には何か……隠された歴史があるんじゃないか（と思うようになった）。ところがプロの研究者によって書かれた歴史（論文）がない。で、自分で作っていかないとダメでしょ。で、即身仏の論文を書いて。そ

❖13〈即身仏〉より、1964-66 年、東京都写真美術館蔵。「どうして焼き捨てたのか」との赤坂氏の問いに、作家は直接答えていない。しかし、ここに回答が示唆されているように読み取れる。初期作品の破棄は写真界を絶った（もしくは断つつもりであった）ことの意志表明だったのではないだろうか。

の時に、ムードだったら写真でも撮れる。ムードじゃだめなんですよ！　論文もあるレベル超えたものね。それを発表しないとね。民俗を撮ったデータ写真じゃダメなんですよ。民俗学じゃなければ。

赤坂：色川大吉さんも読まれてましたよね。[❖14]つまり内藤さんの論文をきちんと評価する人は本当に突き抜けた人たちだけなんです。みんな脅かされるから。怖いんだよ。で、妄想だと（言う）。逃げたいんだよ。

❖14 色川大吉（1925-2021）歴史家。専門は日本近代史、民衆思想史。

内藤：あるレベルを超えなきゃダメですね。写真でも芸術でもね、学問でも趣味でやってるうちはいいんですね。ムードでやってれば。あるとこ超えちゃうとね。苦行が始まりますね。

赤坂：苦行？

内藤：苦行です。山伏も楽しいんですけどね。

赤坂：さっき楽屋裏で初めてご家族にお会いして、（聞いたのは）山に籠るときに体を鍛えるために、内藤さんがマラソン始めたらしいです。その時４年生か５年生の娘さんが一緒に走ってたという。

赤坂：内藤さん、家族大変だったですよね（笑）。食えないしね。でもここまで支えていただいて、内藤さん家族に感謝してますよね（笑）？　他人事じゃないんですよ、これ実は。民俗学者ってみんなそうなんですよ。家にいないし、寄り付かないし、好き勝手やってるし……まあいいんですけど、内藤さん疲れてない？

内藤：大丈夫、ぜんぜん平気です。

赤坂：じゃあ、もう少しやりましょうか。

内藤：この〈即身仏〉の後、北海道の写真群（編註：北海道開拓写真）を発見したからね。なぜか写真評論家たちは、写真（関係）の物しか読んでないから。田本研造は[❖15]……。

❖15 田本研造（1832-1912）箱館（現・函館）で湿板写真術を習得した後、1866(慶応2)年頃から写真師として活動。1871(明治３)年以降、北海道開拓を記録。北海道における初期写真を指導し、多くの門下生を輩出した。内藤は論文「私説・田本研造論」を『季刊写真映像』1969年１月号で発表し、田本を高く評価した。

赤坂：内藤さんが掘り起こした？

内藤：発見したんです。

赤坂：民間に埋もれていた写真なんですか？

内藤：そう、すごい。（田本の写真は細かいところまで）全部写っている、感動して毎日通いましたね。

赤坂：ここからは東北の写真ですね。どうぞ、内藤さんは喋りたいことを喋ってください。

内藤：カマドの神様は火の神様なんですね、ですからカマドの上に祀ってある。カマドを作った時の残りの土でお面を作った。下の（写真）は水の神ですね。

赤坂：ヘビでしょう？

内藤：ヘビです。

赤坂：内藤さんヘビ好きなの？

内藤：嫌いです（笑）。

赤坂：嫌いなの？　最後に聞こうと思ってた写真があるんですけど、内藤さんのウンチの写真……あとにしましょう。この写真 **[図 5]** を覚えておいてください。クライマックスはウンチです（笑）。

〈婆バクハツ！〉〈東京〉

赤坂：もうちょっと先に行きましょう。

内藤：これは〈婆バクハツ！〉**[図 6]**。

赤坂：いいんだよねえ……。

内藤：お婆ちゃんたちは僕、仲良くなってね。これ（恐山の）イタコさん、ノロですよね、沖縄では。口寄せ巫女。食うのと踊るのと酒飲むのと。お墓の横で食っている。

赤坂：内藤さん、この時、一緒に飲み食いしてるの？

内藤：してますよ。これはイタコさん、この頃ストロボ使ってね。

赤坂：ストロボをこういう風に使うのって、内藤さんが初めてなんでしょう？

内藤：隠しておいて、遠くからパッとやったり。

赤坂：そんなことやったらみんな驚くでしょう？

図 5
内藤正敏《妙見菩薩台座 海向寺》〈出羽三山〉より、1982 年、
銀色素漂白方式印画、東京都写真美術館蔵

図 6
内藤正敏《お籠りする老婆 高山稲荷》〈婆バクハツ！〉より、1969 年、
ゼラチン・シルバー・プリント、東京都写真美術館蔵

内藤:色んな事やりましたよ。僕が行くと、ストロボがパッと光るっていうの、お婆ちゃんたちみんな知ってる（笑）。

赤坂：みんな神懸かってくんですよね……これ神懸かりかあ。

内藤：あの、太鼓叩いてね。飛び上がりますからね。

赤坂：結構体重のある女性に見えますが。飛び上がるんですか。

内藤：そういう話になると色々長くなるから（笑）。

赤坂：（時間に限りがあるから）次行きましょう。

赤坂：（スライドを見ながら）もう伝説的な写真ばっかりだね。ここからは〈東京〉ですね。〈東京〉の話も聞かせてください。

内藤：〈東京〉はね、僕はもうほとんどね。親しくなった浮浪者と一緒に東京中を歩いたね。

赤坂：内藤さんも浮浪者みたいな恰好してたんでしょ？

内藤：うん。

赤坂：汚れてるしね、お風呂入らないしね。

内藤：これ、ネズミがね。

赤坂：7匹も写ってんの？　これ？

赤坂：（以前）内藤さんにこの頃の話を聞いたことがあって、「俺はネズミを撮る名人なんだ」って、自動販売機の下からネズミをおびき出す方法とか、「3か月ネズミだけを追いかけていた」ってね、嬉しそうに自慢するんだよね。（会場にいる内藤さんのご家族に向かって）3か月ネズミだけを追いかけている父親ってどうなの？（笑）……でも傑作が撮れましたけども。もうちょっと進めますね。

内藤：（写真を見ながら）これオカマよ**[図7]**。これは酔っぱらって。写真撮ってたら、「お兄ちゃんもっと撮って」なんてね、それで最後逃げて、で、この周りの外野が。

図7
内藤正敏《ほろ酔い気分のオカマ嬢 上野》〈東京 都市の闇を幻視する〉より、1981年、ゼラチン・シルバー・プリント、東京都写真美術館蔵

赤坂：みんな嬉しそうだね。

内藤：「ちょっとだけよお〜」なんてね、可笑しかった。

赤坂：（聴衆の）みなさんに（内藤さんの）顔は見えていませんけど、すごく顔がほころんで嬉しそうです（笑）。これは何年でしたっけ？

内藤：1970 年ちょっと後。

赤坂：東京面白かった頃だ。じゃあ、次行ってください。（写真を見ながら）これ、みんなお友達だよね **[図 8]**。

図 8
内藤正敏《酒を飲む浮浪者 銀座》〈東京 都市の闇を幻視する〉より、1970 年、ゼラチン・シルバー・プリント、東京都写真美術館蔵

内藤：いつも酒を持って歩いてね。

赤坂：一升瓶持って歩いてたの？

内藤：もうちょっと。4 合瓶ぐらいで。「ちょっと飲まない？」って。（そうすると相手が）喜んで。

赤坂：いい写真だよね。

内藤：この人たちはね、自分の良かった時代のことを（話すが）、どこまで本当なのかわからない、だから自分が作ったフィクションなんですね。そういう世界に生きてるんだと思う。それがね、みんな自慢話をやりだすんですよ。

赤坂：じゃあ聞き書きもしてたんだ。

内藤：（聞き書きした内容を）写真集には一部入れてあるんだけど。面白いのだけを。

赤坂：進めましょう。（残りは）あと 10 分ぐらいです。

内藤：これはストリップを写したもの。浅草のビートたけしとかが呼び込みなんかやって働いている。僕が撮ったのはそれよりもうちょっと後になるけど。見世物小屋に僕入って。

赤坂：もう見世物なくなったでしょ？

内藤：なくなったですね。

赤坂：もう最後のがなくなったのかな。

図 9
内藤正敏《ダンノハナ（佐々木喜善の墓より山口集落の生家を望む）》
〈遠野物語〉より、1972 年、
ゼラチン・シルバー・プリント、東京都写真美術館蔵

内藤：自主芸人の人でやってるのがまだ……これはプロで太夫さんっていうんですけど。一緒に「看板大写真展」っていうのをやった。[16] 全部見世物小屋で、放浪して全国を雨露に濡れながらね、回ったんですよ。

赤坂：内藤さんの写真が？

内藤：ええ見世物小屋と一緒に。僕が見世物小屋に通い詰めた時期だね。東京で毎晩……それが最近、もう一度っていう声があってね、慶応大学でやったりね。[17]

遠野物語

赤坂：これ〈遠野物語〉ですね **[図 9]**？　また遠野との出会いを聞くと長くなっちゃうんですけど、遠野で内藤さんは「金属民俗学」って言い出したじゃないですか。[18] あっそうかって思うのは、金属って鉱石から作り出す錬金術ですよね。だからそれが内藤さんの写真にすごくつながってるなって。化学とか技術というものがいつも見え隠れしていて。誰も「金属民俗学」って気が付いてもいないし、興味もなかった時代に内藤さんが本当に先駆的に言い出して。

内藤：これが佐々木喜善の生家[19]ですね、これが土淵とかね、いわゆる『遠野物語』の舞台のところでね、ずっと歩くんですけど、これは鳥がバァッて飛び出した時……金属掘ってた人の家を訪ね歩いてね。

赤坂：残ってたんですよね？　（昔の）道具が。ちょっと註釈しますけど、修験とか山伏ってあの時代の最高のインテリなんですね。化学とか技術とか、あらゆる理系の知識を持っている、とりわけ金属、精錬とか、金山銀山を掘り当てるとか、そういうことの中心にいたんだよね。

内藤：それだけでもね、僕に講義させてもらえればね。

赤坂：講義時間がもうあと 6 分しかない（笑）。内藤さんの本を読んでください。

赤坂：（写真を見ながら）これが佐々木喜善の生家。これが佐々木喜善の墓だね。これ **[図9]** お墓から撮ってるの？　だって（生家から）お墓は遠いでしょ？

内藤：（そこへ）行って、お墓を背中にして、佐々木喜善の生家の

❖16『内藤正敏写真集 東京 都市の闇を幻視する』（名著出版、1985 年）には内藤が見世物小屋で撮影した写真も含まれている。「見世物看板大写真展」は 1970 年、浅草花屋敷前の見世物小屋・稲村劇場ほか、全国各地で巡業開催された。荒木経惟による「荒木経惟写真帖 (通称：ゼロックス写真帖) 第 11 巻」には、「内藤正敏見世物看板写真展　〈女ターザン三人娘〉」と題した、稲村劇場での同展の展示の様子が記録されている。

❖17 第 16 回見世物学会総会　特別展示「内藤正敏　見世物看板大写真展再現」慶應義塾大学北館ホール、2014 年 11 月 16 日開催。

❖18 「金属民俗学」は編集者・松岡正剛との対談の中で語られた概念。『古代金属国家論』（立東舎文庫、2016 年）参照。同書は「日本の背骨のように繋がっている山の中に、かつて山伏のアジールがあった。そこは治外法権で、『もう 1 つの国家』を形成していたのではないか」という前提から語られる、両者による対談で、初出は同名の著書（工作舎、1980 年）。

❖19 佐々木喜善 (1886-1933) 民俗学者、作家。民話、口承文学の収集家。柳田國男 (1875-1962) に故郷・遠野の伝承を語り聞かせた。

方へ向けて。ストロボの光届くはずないですよね。[20]

赤坂：そりゃそうですね。

内藤：そういうところで撮った写真。

神々の異界

赤坂：そうだ、内藤さん。唐突ですけど　富士山の八合目から撮った写真 **[図 10]** があるじゃないですか。

内藤：食行身禄（じきぎょうみろく）[21]が断食の果てに、江戸幕府を批判して（即身仏になった）、その場所から撮った写真。

赤坂：あれ、あんな風に写るんですね。東京の夜景が。

図 10
内藤正敏《富士山》〈神々の異界〉より、1992 年、発色現像方式印画、東京都写真美術館蔵

内藤：今度、これで大展覧会をやろうと思うんだけど、（今回は）ちょっと予告で。入定（にゅうじょう）、死ぬ寸前に、厨子の中に自分が入って、江戸の方を見ながら、幕府に抗議しながら死んでいくんですよ。

赤坂：これ東京の方を見てるの？

内藤：そう、富士山の 7 合目、8 合目。北極星は（画面の）端の方のところにあるんですよね。最後ね、僕がやると、こういう写真になって、何かね、宇宙とか生命、大テーマになってくる。

赤坂：ずっとそうじゃないですか。若い時から、こんな風に覗きながら宇宙を見てるじゃないですか。命の始まりとか。実はすごい知識なんですよ、教養としては。その時代の最先端の学問が教えてくれることを全部知っていて、こうやって（写真を）やってるんですよね。

内藤：化学反応でやった写真、なぜそんな発想が生まれてきたかっていうとね、ポリビニルアルコールですね、土壌改良剤っていうのがね。ある会社が作ってたんです。ぼくがそこに入社するんです[22]（それがきっかけ）。

赤坂：入社？　会社勤めしたの？

内藤：で、一年で辞めたんだけど。

❖20 地図によると佐々木喜善の墓地から生家までの距離は数百メートル離れている（岩手県遠野市土淵町山口）。

❖21 食行身禄 (1671-1733) 江戸中期の宗教家（行者）。富士山・烏帽子岩の前で断食の末に入定、即身仏となる。多くの信仰を集め、富士講の中興の祖とされる。

❖22 内藤は 1961-62 年まで化学繊維メーカーの倉敷レイヨン（現・クラレ）に在籍した。

赤坂：一年よく持ったね（笑）。

内藤：この地球上に生命というものが生まれてくる現場で、どういうことが起こっているのかということを写真で（表現した）。

赤坂：何だか一回転して、世界の始まりとか命の始まりという所に、〈神々の異界〉のシリーズは内藤さん、戻ろうとしていたんですね。内藤さん、本当に世の中にデビューした時から前衛だね。誰もやったことのないことをやり続けて駆け抜けてきて……もう時間も過ぎたので、最後のこれ一枚。

《聖地》

内藤：（写真を見ながら）もっといいウンチがね（あったんだけど）、写真が見せられなくて。

赤坂：さっき覚えていてくださいって言ったでしょ。あのウンチ、内藤さんのウンチなの？

内藤：そう。

❖23 松岡正剛（1944-2024）編集者・著述家。内藤による《聖地》は、松岡が編集長を務めた『遊』組本3 へ組「糞くそ！あるいはユートピア」（工作舎、1980 年）に掲載された。

図 11
内藤正敏〈聖地〉より　1980 年、発色現像方式印画、東京都写真美術館蔵

赤坂：2 か月頑張って、あの色合いとか何か（を生み出した）。

内藤：元々、松岡正剛がやってた『遊』という雑誌で[❖23]（発表した）**[図 11]**。

赤坂：じゃあ 1980 年頃だ。

内藤：そこで僕がやったのは「ウンチ学」というテーマ。

赤坂：さっき僕が見ておいてくださいといったのは、あの台座の写真 **[図 5]** の構図とそっくりなんですよ。（スライドをみながら）ウンチのところにヘビがいますよ。内藤さん気づいてなかったんだ。似てません？　構図が。

内藤：ああ、これ水の神だから（笑）。

赤坂：水の神様で、ウンチのヘビの神様で。

内藤：火伏の神であると同時に、水の神なんです。

赤坂：民俗学の世界って、すごく面白いことをした人が早死にする

んですよ。本当に。いや、こんな話やめよう（笑）。最後はウンチの写真で締めます。

（会場から）：あれは何を食べると、ああいう色艶になるんですか？

内藤：あれはタンパク質が少なくて……でもあれは会心のウンチじゃないですね。（もっと）いいのがあったんですよ。本当は。でもネガがみつからない。

赤坂：もう時間です。内藤さんのかなり本質的なところが今日の語りで出ていたなと僕、思いました。今日会場にいらっしゃるというので、2年ぶりにお会いして、元気そうだったんで、じゃあ対談しようって、この形にして僕は良かったです。皆さんがどこまで聞こえたのか、伝わったのか分かりませんけども、お付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。内藤さんありがとうございます（拍手）。

質疑応答

質問者：〈即身仏〉を撮るにいたった過程を教えてください。

内藤：出羽三山で寺を訪ねて行ったんです。普通は死者をこっちが見る。死者から、僕人間が見られている、視点が逆転している。ジーッと座って睨み返して。身じろぎもしないでいたんです。なぜかって、ちょっと目をそらすとガーッと乗り移られるような感じでね。怖いです。対峙っていう以上に、ジーッとこう睨んでいないと。目線が逆転してるんですよ。即身仏と人間の。山形県が多いんですけど、新潟県にもありますね、各地点々として。必ず僕はそこでね、最初は旅館に泊まり、そのうちにお寺に泊まらせてもらって。お寺に泊まるときは、（即身仏が）飾ってある下で眠ることがありますから。ジーッと見られてるわけでしょ？　そうすると、この背後には必ず何かあるんじゃないかって（思った）。それから僕、民俗学を始めるんです。入定したと言われている年が、実際にそうかは分からないですが、大飢饉の年とかそういう時と合っていくんです。そこで僕はその背後を知りたいってんで（文献を調べた）。ミニ・コピー・フィルムっていう複写のフィルムを（カメラに）入れて、（文献を）本当にものすごい数集めました。

　飢饉の時、人が人を食った話があるんですよ、そういう民俗学研究そのものがないからね。それで自分で開いた民俗学じゃないとダメですよね。あるところまで行くとプロの世界に入り込みますからね。そうすると見えてくるんですね。見えない世界が。そういう事ですね。

質問者：内藤さんは言葉の方でもあり、素晴らしい写真も撮られているんですけど、ご自分の中で言葉と写真のバランス、これは言葉で語りたいとか、これは写真で語りたいとか、そのへんのことをお

聞きしたいと思います。

内藤：確かに言葉と写真、全く違うもの。場合によっては厳選した言葉を写真の横に付ける。

最後は論文のようになっていっちゃうんだけど、民俗学になるんだけど。今回（の展覧会では）僕は一つ一つ（解説を）書こうかと思ったんだけど、足を悪くしちゃって、車椅子に座ってないとできないようになって。雑誌『東北学』の頃は、僕は原稿を書いてました。原稿用紙に手書きで。言葉と写真は全然別ですよね、全く違いますね、僕は最初の個展は白木屋、今のデパート個展。白木屋っていうのは今、東急ストアになってますか？［編註：白木屋は東急百貨店の前身］。まったく若造の僕に（やらせてくれた）。〈即身仏〉の展示の時には、僕は要所、要所に言葉を付けたんです。飢饉の年、何年何年って。僕は資料の原本を見に八戸の図書館まで行った。谷川健一さん、あの人が若い時に（雑誌『太陽』の）編集長やってたでしょ。その時に宮本常一さんを呼び込んで。[24] 谷川健一さんってあの人、歌人ですから。宮本常一さんは文学、詩人だった。単なる研究者だけじゃないんですね。東北芸工大にも時々いるんですね、そういう変な外れたやつが。

❖24 谷川健一（1921-2013）民俗学者、歌人。
宮本常一（1907-1981）民俗学者。

赤坂：岡本太郎も言葉と芸術は、またちょっと違うと思うんですけど、内藤さんの言葉と写真の関係は、一言では答えられないですね。でもすごく自分の言葉を持っている作家であるが故に、その言葉の質って考えてみたいなって思いましたね。疲れたと思います、内藤さん、もうこれくらいにしましょう。

内藤：どうもすみませんでした、ありがとうございます。（拍手）